

土左日記のコペルニクスの転回——目次

『土左日記』のコペルニクスの転回——序にかえて……………ヨース・ジョエル：1

第一部 シンポジウム 座談会『土左日記』再検討

——思想文化、歴史哲学、世界文学、散文——……………5

パネリスト紹介……………総合司会 山口善成：7

発表 I

九三〇年〜四〇年代、世界の思想文化……………ヨース・ジョエル：11

——『土左日記』と小さな帝国の誕生——……………ヨース・ジョエル：11

発表 II

「国風文化」の中の『土左日記』——民衆史の視点から——……………木村茂光：25

発表 III

知のアマチュア／哲学者が読む『土左日記』……………鹿島徹：33

発表 IV

『土左日記』における子どもの表象……………スエナガエウニセ：41

——「世界文学」としての可能性——……………スエナガエウニセ：41

発表 V

『土左日記』の散文文学性、あるいは歌学批判……………東原伸明：53

フリーディスカッション……………64

第二部 論文……………99

『土左日記』と世界——10世紀前半の「世界」と日本文明——……………ヨース・ジョエル：101

『土左日記』の主題について・再論	木村茂光	131
——ジェンダー史・民衆史の視点から——		
船のなかの「見えない」人びと	鹿島徹	163
——哲学者／知のアマチュアが読む『土左日記』——		
『土左日記』の主語や呼称、主題や「第三の項」についての覚書	スエナガエウニセ	183
歌学批判から見た『土左日記』の散文文学性	東原伸明	211
——もしくは『土左日記』のコペルニクスの転回——		
紀貫之『土左日記』と菅原道真『菅家文章』	佐藤信一	245
卷三「寒早十首」の表現について——「楯取」を軸として——		
あとがき	東原伸明	315
和文・英文要旨 <small>(左開き)</small>		005
執筆者紹介 <small>(左開き)</small>		001

あとがき

本書は、『土左日記』を「日本文学」の「古典」という狭い枠組みから解き放ち、思想史、文化史、歴史、哲学、世界文学等々周辺科学の広い視野に立ち、その分野の力を借りて作品の可能性を見出し検証することをコンセプトとしている。書名『土左日記のコベルニクスの転回』は、そうした意を込めつつ、既存の研究姿勢に対する「挑発」でもある。

第一部は、編者二人の奉職する高知県立大学で開催された公開シンポジウム「座談会『土左日記』再検討―思想文化、歴史哲学、世界文学、散文―」（高知県立大学・同文化学部共催）の模様を収録した。

第二部はそのシンポジウムで各パネリストが扱った問題の発展やあるいは新たな問題意識により執筆された論文を掲載した。なお、シンポジウムでは扱えなかった問題の補足をパネラー以外に原稿依頼し、日本漢文の立場から佐藤信一氏の稿を掲載するに及んだ。

さて本書の企画を思い立ったのは、二〇一四年の暮れのことである。翌年に第四著作集『土左日記虚構論―初期散文文学の生成と国風文化』を刊行すべく旧稿を読み直し手を入れている

と、問題部分が浮かびあがってきた。つまり、もっと広い視野から根本的な見直しが必要であることを痛感した。早速、武蔵野書院の前田智彦社長におおまかな趣旨と企画をお話し、幸い快諾を得られたことで本書刊行の道筋がついたのであった。

『土左日記』は五十九首の和歌と二首の歌謡、合計六十一首の歌を所収している。その構成からすれば、ありていに「歌の本」という印象が強い。だから従来は、和歌に比重を置いた研究がなされてきたし、今後も基本的にはそうであろう。しかし、『土左日記』を嚆矢として『蜻蛉日記』など王朝女流の日記文学が発生し、物語文学の『源氏物語』に繋がる散文の文学の歴史を重視する観点からすれば、所収の「和歌」のみならず、「地の文」・「会話文」・「内話文」・「草子地」・「自由間接言説」・「自由直接言説」等々の、『土左日記』を構成する言説の分析を通して、もっと散文じたいにアクセントを置いた研究がなされるべきではないか。それが私の持論であるが、しかしこれも、「日本文学」の「古典」という狭い見地からの見直しの提案に過ぎないだろう。

まず本書の企画構想において、歴史学の木村茂光氏（註1）の存在、およびその著書『国風文化』の時代（註2）（青木書店、一九九七年）は、大きな暗示であった。夙に木村氏は、「紀貫之が最初に私的な世界として描いたのが地方の人々とその生活であったことを重視したい。政治的でもな

く都市的でもなく、さらに貴族的でもないという三重の意味で「私的」世界（公的世界に対比して）であったのだ。（…）当時第一級の文人であった貫之によって、初めて船頭や楫取や海女など地方民衆の姿が生き生きと描かれることになったのである」（『国風文化』の特質（註3））と、指摘されていた。これは『土左日記』を「世界文学」として読みうる可能性を示唆し、切り拓く発言と言えるのではないか。私の立場からは、むしろ『源氏物語』の続篇「宇治十帖」の世界、価値観を先取りをしているとも考えるべきではないかと思われた。民衆史を基調とする木村氏の観点は本書の刊行以前に既に、「コペルニクスの転回」を遂げていると言わなければならない。

哲学の鹿島徹氏の存在は、その「転回」を促す、起爆剤である。一見存在しているように見えないが、しかし、確かに在るものとして読まなければならないとするのが、「知のアマチュア」を標榜する鹿島氏の歴史哲学的な立場のようである。鹿島氏はヴァルター・ベンヤミンの著書の翻訳者として『新訳・評注』歴史の概念について（註4）（未來社、二〇一五年）も刊行されているが、ベンヤミンのみならず、近年精力的に執筆された一連の論稿があり、既に『土左日記』の歴史哲学的な研究の第一人者だと言えよう（過去の痕跡との出会い―ベンヤミンと『土左日記』―）『アナホリッシュ國文學』創刊第1号、二〇一二年、一二月。「日記を書く者―ヴィトゲン

シユタインと紀貫之―』『アナホリツシユ國文學』第2号、二〇一三年三月。「楫取と船君―逆なでに読む『土左日記』』『アナホリツシユ國文學』第3号、二〇一三年六月。「仮名文とナシヨナリズム―『土左日記』における〈虚実〉問題・再考―』『アナホリツシユ國文學』第4号、二〇一三年九月。「哲學的歴史理論から見た『土左日記』』『武蔵野文學』61、二〇一三年一二月。）

私が出会った頃のスエナガ エウニセ氏は、ブラジルから東京大学の大学院に留学した『源氏物語』の研究者であった。近年、村上春樹の翻訳家として『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』のポルトガル語訳を刊行し、翻訳家に転身した。シンポジウムではその立場から「世界文学」としての『土左日記』の可能性を説いていたが、『土左日記』のホルトガル語訳を試みたところから、第二部の論文は新たな転回ないし、展開を見せている。

本務旧カリキュラム授業に、「文化学入門」（オムニバス）という講義があった。毎回、文化学部の教員が二人一組単発で、学部一年生に向けて「文化とは何か」をそれぞれの立場から啓蒙するという趣旨で、或る年私は『土左日記』を題材に話をしたことがあった。その準備をしていた時だったろうと記憶するが、偶々その場に居合わせた日本思想史・日本文化史を専門とする同僚教員は、私の資料を眺めると、「先生、紀貫之が『土左日記』を書いた頃、世界はどんなだったでしょうかねえ」という問いを發した。そんなことは考えたことも無かったので困

惑し、何も返答できなかった。強烈な思い出である。そんな突拍子もない疑問を呈した同僚の、ヨース・ジヨエル氏の顔を、宇宙人を見るように見返した私は、しかし、〈そんな疑問に回答できたら、これはすばいことではないか〉とも思い直したのである。その時の印象を今日までずっと引きずってきて、どうやら「コペルニクスの転回」の萌芽は、〈ヨースさんにあったのか〉と気づき、共編者をお願いするとともに序文の執筆とSummaryの作成を依頼した。

シンポジウムのパネラーの選定は右のような理由に拠ったのだが、当日の司会と同僚で、ハーマン・メルヴィルを専門とする米文学の研究者、山口善成氏にお願いをした。皆さんの賛同が得られなければ実現しないものであった。もともと、最初から〈公開で〉とは考えなかったが、〈わざわざこれだけのメンバーが一同に介して、何も「東京」の「密室」で行うこともないじゃないか〉と思い、急遽、「地域貢献」の道を探った。二〇一五年四月高知県立大学永国寺キャンパスは、道を隔てた旧グラウンドに教育研究棟を完成させ、僅かの距離ながら一区画別の区画に移転した。二百人を越える人数を収容可能な大教室が三つも新設され、シンポジウムといった催しをするにもってこいの状況となっていた。開催のための費用には苦慮したが、偶々、南裕子学長より私用のメールがあり、返信に「実は……」と、この話を申し上げたところ、学長管理分の予備費より頂戴できることとなり、開催の目処がたった。

シンポジウムの協賛企業となってくださった武蔵野書院の前田智彦社長は、おうふうの坂倉良一社長と話し合い、費用を両社の折半ということで、ポスターを印刷し、全国の大学や研究機関に郵送してくださったばかりか、開催当日は遙々来高され見届けてくださった。

後援は、高知新聞社・RKC高知放送・NHK高知放送局・高知県立文学館・高知県立図書館・高知市民図書館・公益法人高知市文化振興事業団・高知市教育委員会・土佐山内家宝物資料館・土佐史談会・イーストフィールズ財団が名を連ねてくださった。

当日の準備と片づけは、私が主催する「県民源氏物語講読の会」の中川雅子氏、片岡磨早子氏、宮地令子氏、東原研究室の卒業生高橋美由紀さんの音頭でゼミの学生たち、ヨースゼミの学生さんがお手伝いをしてくれた。なお、シンポジウムの写真は、東原ゼミの小村千晶さん撮影のものを使用させていただいた。

お世話になった皆様様に、感謝申し上げます。

二〇一六年一〇月

東原伸明